

真田地域協議会 分科会 協議報告

平成 25 年度 第 1 分科会

分科会協議テーマ 「地域ブランドの確立」

| 役 職 | 委員氏名 | 自治センター |
|-------|-------|----------|
| 分科会長 | 田中 新平 | 藤沢地域振興課長 |
| 副分科会長 | 竹村 好平 | 滝沢産業観光課長 |
| | 一之瀬 勤 | 佐藤上下水道課長 |
| | 小林 満子 | 林地域政策係主査 |
| | 古市 正明 | |
| | 堀内 朝子 | |
| | 丸山 進 | |

1 はじめに

真田地域では「地域まちづくり方針」にある『魅力ある農業の推進』『特色ある観光の振興』に向け、それぞれの戦略プランが策定され様々な取り組みが進められていますが、第1分科会では、その取り組みの効果を一層上げるために農業と観光の一体化した情報の発信が必要ではないかと考え、地域ブランドについて検討してきました。

真田地域の地域ブランドを確立することにより、真田地域で採れたものが高く売れる、あるいは加工したものが全国に販路を拡大することになれば、遊休農地の積極的な活用により地域農業の活性化につながるものと考えます。また、地域ブランドの確立は、真田氏をはじめとした歴史資産や素晴らしい自然など優れた観光資源にさらなる付加価値をもたらし、地域イメージの向上と共に地域産業の活性化及び一層の観光客の誘客が図れるものと思います。

2 現状と課題

地域ブランドになり得る物やイベントなど模索し、意見を交わすなかで、地域内で活動する様々な団体とその取り組み内容に着目し、それらの発展・活性化が糸口になるのではないかと議論を重ねました。

(1) 課題点として挙げられた項目

- (ア) 地域の中で様々な活動をしている個人・団体が存在するものの、各々の活動に留まり、互いの活動を知らず、連携・協力できていないのではないかと。
- (イ) 各活動団体の高齢化、後継者不足が深刻であり、リーダーシップを執る人材と地域内で中心となる組織がないことから地域の強みなどの特徴を活かした独自性溢れる視点に結びつかないのではないかと。
- (ウ) ゆきむら夢工房や周辺スポットでのイベントが単発になってしまっている。また、イベントの際に、ゆきむら夢工房の施設を拠点に活動している各専門部会と他の団体などがうまく連携できていないため、施設を有効活用できていないのではないかと。
- (エ) 地域のイベントなどの企画・運営において、行政の主導・行政への依存ではなく、地域住民自らが地域を考え、行動できる仕組みを作っていく必要があるのではないかと。

3 協議内容報告

課題点を整理し、次のように協議しました。

(1) 各団体の連携・調整・協力を図る仕組みづくり

真田地域で活動している各団体が、それぞれに活動するだけでなく、互いの活動を知り、連携・協力して地域イベントなどに取り組めるような仕組みづくりが必要ではないかと考えます。まずは、真田まつり実行委員会を中核として地域内の団体に呼び掛け、定例的に横のつながりが取れる組織を立ち上げて情報を交換し、イベントの開催日程など調整を図ることからはじめ、将来的には各イベントを企画・運営する実行組織となり、一元的な情報発信ができることを期待します。

また、組織設立後は信州上田まつり実行委員会とのつながりを深め、各方面で連携・協力するとともに、観光客が中心市街地と真田地域を互いに行き交い、滞在時間を増やしてもらうための研究に取り組んではどうかと考えます。

(2) 『真田ならではの』の創出

多様な団体が一堂に会する機会を創ることで人と人のつながりができ、情報や意見を交換するなかで、新たなアイデアや活動が生まれるものと思います。その中から、リーダーシップを執る人材や真田地域の特色あるモノが生み出されるきっかけになるものと考えます。

(3) ゆきむら夢工房を観光の拠点として活用

立地条件に優れる『ゆきむら夢工房』を真田地域の観光拠点として再認識し、地域で活動する団体が連携・協力して施設内の設備を有効に利活用し、イベントを企画・運営、あるいは参加することにより、地域の情報発信拠点として『おもてなし』の機能強化及び知名度向上が図れるものと考えます。また、これにより観光客のさらなる集客と地域間交流促進による地域の活性化に期待がもてるものと考えます。

4 おわりに

全国的に知名度と人気が高い真田氏、豊かな自然、良質な農産物など、豊富な地域の魅力をより一層活用した物品や催しを地域住民が主体となり考え、実行できる仕組みができることが、観光の振興や農業の活性化に良い効果をもたらし、地域経済の発展に寄与するものと考えます。

真田地域協議会 分科会 協議報告

平成 25 年度 第 2 分科会

分科会協議テーマ 「公共交通の利用促進」

| 役 職 | 委員氏名 | 自治センター |
|-------|-------|----------|
| 分科会長 | 佐藤 論征 | 中山建設課長 |
| 副分科会長 | 山口 市江 | 西澤市民生活課長 |
| | 清水 茂 | 滝沢地域政策係長 |
| | 関 貞徳 | |
| | 山口 佳子 | |
| | 横沢 憲治 | |

1 はじめに

第2分科会では、平成22年度から真田地域まちづくり方針の「地域の活性化に向けた交通ネットワークの整備」における「住民生活の利便性の向上が図られるよう、公共交通機関の確保・充実」の具体化に向け、路線バスを維持するための取り組みについて協議をしてきました。

第3期協議会（H22～23）では、平成24年1月20日に意見書（①利便性に配慮し地域住民のバス利用を促進、②観光客のバス利用を促進）を提出しました。

路線バス事業者は全て赤字経営であり、行政からの補助を受けてバスを運行しています。全国的には補助額の増加に対応できずに廃線となる路線バスも多いなか、上田市では利用促進策として、平成25年10月1日から運賃低減バスの運行を予定しています。これは、運行経費補助から利用者補助に視点を定めるものです。

第4期協議会（H24～25）においては、この上田市運賃低減バス運行計画と平成23年10月に発足した真田地域公共交通利用促進協議会の活動を踏まえ、公共交通の維持は必要であるという観点から、利用促進に向け利便性の向上について協議を進めてきました。

2 協議経過

平成24年8月22日から平成25年9月11日まで、11回の協議を行ないました。
主な内容は別表のとおりです。

3 公共交通を巡る問題点

(1) 利用者の減少

自家用車の普及とともに道路整備が進み車社会となってきたことから、路線バスは利用者が減少しており、バス事業者の経営を圧迫しています。下表は、上田バスの全路線の実績ですが、輸送人員・輸送収益ともに大きく減少し、輸送損益も赤字幅が大きくなってきています。

| 区分 | 昭和62年度 | 平成24年度 | 備考 |
|------|-----------|----------|--------|
| 輸送人員 | 174万人 | 31万人 | 5分の1以下 |
| 輸送収益 | 3億9,150万円 | 9,480万円 | 4分の1以下 |
| 輸送損益 | △5,930万円 | △1億220万円 | |

(2) 過疎化・高齢化の進行

全国的に人口減少となりつつあるなか、真田地域も 10 年間で人口は 7.6%減少し、高齢化率は 4%上昇しています。利用率を維持しても人口が減少すると利用者数は減少してしまいます。

| 区分 | 平成 14 年度 | 平成 24 年度 | 比較 |
|------|----------|----------|--------|
| 人口 | 11,857 人 | 10,955 人 | △902 人 |
| 高齢化率 | 23.4% | 27.4% | 4.0% |

参考) H24 高齢化率 長野県 27.1% 上田市 26.2%

(3) 利便性の低下

利用客の減少により経費節減のため便数が減らされ、経営改善のために運賃が値上げされます。そのことが利用者の減少につながるという悪循環により利便性が低下しつつあります。

(4) 補助金の増加

真田地域の路線のうち、傍陽線は従来から廃止路線代替バスとして行政から補助を受けており、その補助金額も利用者の減少により年々増加しつつありましたが、平成 23 年度からは菅平高原線も補助対象となったため、補助金額が大きく増加することとなりました。

| 区分 | 平成 19 年度 | 平成 21 年度 | 平成 23 年度 |
|------|----------|----------|----------|
| 補助金額 | 1,270 万円 | 1,540 万円 | 3,780 万円 |

4 公共交通を巡る課題等

- (1) バス路線維持のための補助金を減らす対策
- (2) バス利用者の利便性の確保・向上
- (3) 地域の公共交通は地域住民の手で守るという意識の浸透
- (4) 補助金依存体質によるコスト削減やサービス向上意識低下の懸念

5 公共交通を「乗って残す」ために

(1) 「路線バス運賃低減化」の成否

幸い、上田市ではバス路線を確保・維持・活性化するため「運賃低減バス運行計画」を立案し、この 10 月から「路線バスの運賃低減化」の試行に取り組みます。京丹後市が、最高運賃 1140 円を一律 200 円にして成功（収入増）しているように、かなり期待

されますが、地域住民がバスに乗ろうという行動を起こすかどうか成否のカギとなります。

そのため地域住民、学校・PTA・諸団体・企業などに出向いて説明したり、有線放送を繰り返し活用するなど、制度の周知を図っていただきたい。

また、自治会による「地域住民への回数券の購入付与」なども検討してみる必要があると思われます。

(2) ゆきむら夢工房のバスターミナル化

「ゆきむら夢工房」前のバス停はバス待避所がないため、夢工房駐車場をバスターミナルとして活用することを提案します。それにより乗客の利便性向上と施設の利用増を促し、観光客に対する案内充実・おみやげ等の販売促進が図られます。

(3) 観光客のバス利用促進

トレッキング客や登山等の観光客による路線バス利用促進も検討に値すると思われます。また、バス停に観光案内パンフを置くなどの工夫も望まれます。

(4) ふれあいバスと路線バス・オレンジバス等との連携

それぞれ、目的が異なるバスですが、先線への乗り継ぎ、途中下車など工夫した連携が望まれます。

(5) 定期券発行場所の増設

現在、真田地域内にはJA長店しか定期券の発行場所がありません。ゆきむら夢工房・西友真田店・コンビニエンスストアなど発行場所の増設が望まれます。

(6) その他の利用促進策

イベント時の車掌復活を望む声もありました。

(7) ゾーンまたは時間単位での運賃設定の検討

将来の課題としては、同一ゾーンであれば同一運賃で乗車できるような設定の検討が挙げられました。

6 おわりに

この10月から始まる「路線バス運賃低減化」の試行には、当分科会としても、大変大きな関心を持っています。そして、なんとしても利用者の増加につながるよう、協力や努力を惜しまないところです。

路線バスの廃止は、高齢者や児童生徒、また自動車免許が無いなど公共交通に依存せざるを得ない人の移動の自由を奪うこととなります。地域全体で公共交通のあり方を真剣に考える必要があります。路線バスを「乗って残そう」の掛け声のもと、「公共交通を地域の手で守る」という意識の浸透を期待して止みません。

そして、制度的な隘路の多い中で、少しでも改善策につながる幾つかの提言を試み、公共交通の利用促進が図れるよう、地道な努力を積み重ねたいと考えています。

(別表) 協議経過

| 開催日 | 主な協議事項 |
|-------------------|--|
| 平成 24 年 8 月 22 日 | <ul style="list-style-type: none"> ・真田地域公共交通利用促進協議会総会資料の説明 ・夢工房をバスターミナル化・ふれあいバスとの連携について ・バス運賃低減化(京丹後市)例について |
| 平成 24 年 9 月 13 日 | <ul style="list-style-type: none"> ・路線バスについて地域づくり委員会で出された意見について ・他地域の取り組み事例(東御市のレッツ号、丸子地域のまりんこ号、三重県玉城町のオンデマンドバス) |
| 平成 24 年 10 月 17 日 | <ul style="list-style-type: none"> ・「ふれあいバス」について ・運賃の設定について |
| 平成 24 年 11 月 14 日 | <ul style="list-style-type: none"> ・上田バスからバス運送の状況(輸送人員・輸送収益等)説明 ・利用促進対策について |
| 平成 24 年 12 月 12 日 | <ul style="list-style-type: none"> ・利用促進対策について ・真田地域公共交通利用促進協議会の活動について ・利用促進のため若者対策等 |
| 平成 25 年 3 月 19 日 | <ul style="list-style-type: none"> ・運賃低減バス運行計画について説明(全体会) |
| 平成 25 年 5 月 15 日 | <ul style="list-style-type: none"> ・運賃低減バス運行計画について説明(分科会) |
| 平成 25 年 6 月 19 日 | <ul style="list-style-type: none"> ・運賃低減バス運行計画の周知について ・定期券の販売場所の増設、乗継割引等の利便性の向上 等 |
| 平成 25 年 7 月 17 日 | <ul style="list-style-type: none"> ・「ふれあいバス」について ・真田地域公共交通利用促進協議会総会について ・路線バスのゾーン制運賃について(海外の例) |
| 平成 25 年 8 月 21 日 | <ul style="list-style-type: none"> ・運賃低減バス実証運行のお知らせ ・路線バスとふれあいバスとの連携について |
| 平成 25 年 9 月 11 日 | <ul style="list-style-type: none"> ・分科会中間報告案の検討 |

真田地域協議会 分科会 協議報告

平成 25 年度 第 3 分科会

分科会協議テーマ 「福祉・防災・定住化の推進」

| 役 職 | 委員氏名 | 自治センター |
|-------|--------|-----------|
| 分科会長 | 山宮 浩美 | 若林健康福祉課長 |
| 副分科会長 | 長崎 伊登子 | 柳沢教育事務所長 |
| | 内海 美香 | 佐藤消防課長 |
| | 下条 幹男 | 西澤地域政策係主査 |
| | 半田 榮範 | |
| | 松木 節子 | |
| | 柳沢 章夫 | |

1 はじめに

第3分科会では、真田地域のまちづくり方針にある「安心して暮らせる地域づくり」のため、今の真田地域での課題は何かを考え、「福祉・防災・定住化の促進」の3つのテーマについて話し合いを進めてきました。

(1) 福祉について

高齢者や障害を持っている人など、援護が必要な方への支援については、自治会ごと災害時要援護者登録制度（災害時住民支え合いマップ）へ登録し、取り組みが行われています。

真田地域では36自治会のうち、30自治会で制度の取り組みを決定（9月末現在）しています。また、未だ取り組みを決定していない自治会においても、担当課が説明会を開催するなどして、制度への登録を呼びかけているということ。また、登録に向けて積極的な動きがあるとも聞いております。

今後も、援護を必要とする方も安心して暮らしていくことができる地域づくりを望みます。

(2) 防災について

自治会ごとに自治会長がリーダーとなり、自主防災組織が作られ活動されています。

各自治会で行われる防災訓練では、自治会が消防署へ職員の訓練への参加や講師を要請し、自主防災の意識が高まりつつあると感じています。

特に、平成22年3月11日に発生した東日本大震災後は、防災に対する住民の意識も高まっており、防災訓練の時に要援護者の安否や支援方法などの確認も行われるなど、福祉と防災の取り組みが結びつき、より実践的な活動が行われているように思われます。

また、ある自治会では、自治会とは別に自主消防隊を組織し、定期的な自治会内の見回りや地域内のお宅への訪問などが行われていて、地域の防災活動が積極的に行われているとお聞きしています。

消防団員も減少している中で、このような取組事例も参考にしながら、今後も各自治会で積極的な防災活動が行われることを望みます。

(3) 定住化の促進について

全国的に人口が減少する中で、真田地域でも年々人口が減少し、高齢化率が高くなっています。

人口の減少や高齢化率の上昇に伴い、空き家や遊休荒廃農地が増加しており、このままでは真田地域が廃れていってしまうのではないかと考え、いられません。

当分科会のテーマでもある、福祉や防災の取り組みについても、自主防災組織で活動できる人が減り、援護を必要とする人が増加していくことが予想されます。

災害時要援護者登録制度（災害時住民支え合いマップ）に登録したり、自主防災の組織を作っても、実際に動ける人がいなければ安心して真田地域で暮らすことはできません。

このようなことから、真田地域に住む人が、お互いに助け合い、支え合って安心して暮らすことができるためには、真田地域の人口減少に歯止めを掛け、移住や定住により人口が増加し、地域が活性化することが重要と考え、「定住化の促進」について協議を進めてきました。

2 真田地域の現状

真田地域の人口減少に歯止めを掛け、真田地域へ移住・定住する人が増えることにより人口が増加し、地域が活性化するためにはどのような対策があるか考えるために、人口が減少している原因として考えられることと、真田地域の魅力について協議しました。

(1) 人口が減少している原因として考えられること

①仕事について

- ・ 真田地域に就職先がない（少ない）。

②公共交通・道路整備について

- ・ 路線バスの運賃が高く、運行時間も少ない。
- ・ 道路整備が遅れている。

③農業について

- ・ 移住をして農業をしたいと思っても、指導してくれる人がいない。また、農作業用機械が必要だが、高額であり使用頻度も少ないため購入して農業をする人がいない。また、貸してくれるようなところもない。など、農業がしにくい環境ではないか。
- ・ 子どもが家庭で農業を経験しない環境になっている。また、学校でも、担任の先生によって農業体験に差がある。

④子育て環境

- ・ 教育環境（塾など少ない）が適さないためか、若い夫婦が転入してこない。

⑤自然環境

- ・ 夏は涼しいが、冬は雪が降り寒さも厳しいことにより生活が大変。

⑥その他

- ・ 全国的な人口の減少。

(2) 真田地域の魅力

①仕事について

- ・ 真田地域には少ないが、上田市街地などに行けば働くところはある。

②公共交通網・道路整備について

- ・ 高速道路や新幹線が整備されたことにより都市へ行きやすい位置にある。
- ・ 30（サンマル）構想による交通網の整備計画により、上田市街地などへ行きやすくなっている。
- ・ 運賃低減バスの実証運行が始まったことにより、運賃が下がり、運行時間も拡大した。

③農業について

- ・ 学校で農業体験をしているクラスでは、家族からやり方などを聞いたり、祖父母に手伝ってもらうなど、地域との結びつきを大切にしながら農業体験をしている。

④子育て環境

- ・ 豊かな自然に囲まれ、地域で子育てができる。
- ・ 自治会行事などに参加することで郷土のことを知ることができる。
- ・ 各小学校で行われている「ふれあい伝承広場」で、地元の歴史や文化などを伝えている。
- ・ 児童、生徒数は少ないが、学校や保育園などでは、一人ひとりに先生の目が行き届く。

- ・ 保育園の待機児童がない。

⑤自然環境

- ・ 自然が豊かで、自然災害が少ない。

⑥その他

- ・ 行政によって、上田市定住自立圏構想の取り組みや空き家バンクの検討がされている。

3 真田地域への定住化促進のために

真田地域の人口減少の原因と真田地域の魅力について協議をし、真田地域への定住化促進のための対策案を以下の3つにまとめました。

(1)「真田地域の特色がもっと出せるようなホームページ作り」

田舎暮らしを希望している人が移住先を選ぶために何から情報を得るのか。と考えたとき、インターネットが普及した現代においては、その割合が多数を占めているのではないかと考えられます。

上田市のホームページは、観光情報がメインで、移住や定住に係る情報は、別サイトにリンクはされていますが、広域的で真田地域がPRされているページが少ないと感じます。

真田地域へ移住や定住をしたい。という人が増え、実際に転入してもらえるように、真田地域の情報や魅力をもっと発信できるようなホームページが必要ではないかと考えます。

(2)「住民に真田地域のことを知ってもらうためのギャラリー造り」

真田地域に住んでいる人に真田の魅力をもっと知ってもらうことで真田地域への定住化を図りたいと考えています。

地域の魅力を知ることで、故郷への思いや誇りも深まり、進学などで転出した若者も故郷真田に戻ってくる。そして、その思いは次の世代へと引き継がれて、真田地域に定住する若者が今よりも増えていくのではないかと考えます。

ギャラリーの場所としては、真田地域自治センターや真田図書館は、立地場所的にも住民が来やすいところだと思われることから、これら施設が有効利用できないかと考えます。

(3)「地元の子どもたちへの農業体験」

地元の子どもたちが農業体験をとおして、真田の豊かな自然、収穫の喜び、農業の良さを知ること、真田の地で農業を後継してほしいと考えます。

子ども達は家で農業を営んでいても、部活動や社会体育・社会教育活動などにより農業に携わることが少なくなっているようです。

両親も会社等に勤務し生計を立てている状況から、親子で農業に携わる機会も減っているのではないかと考えられます。

田畑を耕作する人は高齢化し、後継者もいなくなり、遊休荒廃農地も増えています。

小中学校では学級農園もあるようですが、担任によって取り組み方なども違い、耕作するクラスもあれば、花壇になってしまったクラスもあったとお聞きしています。

一方で、都会の学生が授業の一環として農業体験にやってきます。お茶請けとして出される漬物やかえるなどの小動物に感動し、農業体験学習だけでなく、田舎の生活や自然を満喫していくともお聞きします。

真田地域では当たり前のことでも都会から来る子ども達には新鮮で感動的な体験のようです。真田地域の子どもたちに、真田は自然が豊かであり、それはすばらしいことなのだということを知ってもらい、この豊かな自然を守るためにも真田の地で農業を引き継いでいって欲しいと考えます。

その方法として、現在行われているイベントをそのまま継続、拡大していく方法があるのではないかと思います。

例えば JA 婦人部が企画している農業体験では、婦人部が学校に行き子ども達に農業を教えながら収穫の喜びを味わってもらおう。とか、さなだ中央公民館で行っているわんぱく木工塾では、森林体験などに多くの子ども達が参加してくれるよう呼びかけに工夫をする。などの方法があると思います。

学校の協力も得ながら、既存のイベントを拡大してはいかがかと考えます。

4 おわりに

全国的に人口が減少する中で、各自治体でも移住、定住に向けた取り組みが進められています。

真田地域でも年々人口が減少し高齢化率も高くなっており、このままでは、地域住民がお互いに支え合って暮らしていくことも困難になってしまうのではないかという危機感さえ覚えます。

真田地域に住む私たちが、お互いに助け合い・支え合いながら安心して暮らすことができる地域であることを望みます。